今回のオピニオンは、今年８月に開催される秋田ワールドゲームズ２００１の事務局でオリエンテーリング競技運営を担当している渡部正軌氏にお願いした。氏は、昨年４月からこの職場に勤務したオリエンテーリングに関してはいわば素人、しかし立場上、オリエンテーリングに関してはこのオーマガジンの閲読から IOF の資料まで、広範囲に目を通している。非オリエンティアにあって、彼ほどオリエンテーリングを知っている人はいないとさえ言える。そんな視点から「一日本国民の個人的な視点」としてオリエンテーリングに対するオピニオンをいただいた。

「知的」なＯＬ

この１年ほどでOL 関係者とお会いする機会に恵まれたわけだが、どの方々にも共通した印象を持った。「知的」であり、紳士（真摯）で、親切な方々ばかりだという印象である（これは決してお世辞ではない）。自分がOL担当になった昨年５月頃、県連が主催するＯＬ初心者講習会に参加し、実際にＯＬを体験した際にその理由の一端を見た気がした。その体験コースは小山にある公園で１kmほどのものに過ぎなかったが、やってみるとＯＬ用の地図など全くちんぷんかんぷん、コンパスの使い方はしどろもどろ、最初こそ歩測していたもののそれも第１コントロールくらいまで。ぼろぼろの状態で何とかゴールしたわけだが、完全に「ＯＬ」に手荒い洗礼を受ける形になった。ＯＬとは複数の作業を同時進行で行なうことを要求するなんとチャレンジングなスポーツであろうか。ＯＬはよく「知力と体力の」といった言葉で形容されるが、特に「ナヴィゲーションスキル」という言葉に凝縮される地図を読む能力、自分の現在位置の把握する力、そして最適なコースの選択などの知的面の要求度は他のスポーツの比ではない。また主に森自体が競技会場であるが故に、当然環境に「やさしい」人柄が求められるし、競技運営サイドも膨大な労力が費やされる地図作りを始め、非常にシステマティックな作業が必要となる。（ＯＬ以外にこの世界中の数あるスポーツの中で「○○競技運営学」なるものが存在するものがいくつあろうか）このようなスポーツの競技者、または運営者が知的でないわけがない。余談ではあるが、自分の同僚が夫婦揃って同じ講習会に参加したところ、その後の数日間、同僚の奥さんはご機嫌斜めになった。ＯＬがおもしろくなかったというわけではない。同僚が１位、彼女は２位という結果が気に入らなかったのである。同僚曰わく、テニスやマラソンで負けたのであれば、奥さんも納得がいく。ＯＬで負けたこと＝知的面で旦那に劣るということが彼女の不機嫌の理由だと言うのだ。おそるべし夫婦。ちなみに自分は彼らの倍近くもの時間がかかったいうのに。

ＯＬを取り巻く日本の状況

ＯＬの知的な面はその競技性に欠くことのできない根幹となる要素であると共に、OL が大衆スポーツになることを阻害する要因にもなりうる。例えば「たばこを吸うと成績が下がる」という研究報告があるとする。これは研究前の被験者のグルーピングが均一でなければ全く根拠のない研究と言わざるを得ない。というのは成績が良くないからたばこを吸う可能性を否定できないからである。我々はときに原因と結果の区別ができない事象に出くわし、都合のいいように判断しがちである。

さて、ＯＬをしたから知的になるのか、知的だからＯＬをやるのか？答えの出ない問題である。ただし仮に後者の方が正しいとすれば、ＯＬの普及には見えない壁がある。この慌ただしい現代の日本社会にあって、知的面の欲求を満たすためにスポーツを選ぶ人はまずいまい。大半の人は日々のストレス解消のためであったり、ダイエットのためであったり、純粋に体を鍛えるなどの目的でスポーツを選択し、小難しいことを考えながらスポーツをしたいとはあまり望まないのではないだろうか。無論ＯＬにはフィジカル面や自然の中を走る爽快感など魅力は多々ある。ただ余分な負荷を避け、気楽な娯楽としてスポーツを求める一般大衆にとってはこのような目的だけを成就したいのであれ

ば、ハイキングや山登りで事足りてしまう。

次にOLを取り巻く外的環境に目を向けてみる。あるスポ少のサッカー部の監督から聞いた話である。来年に韓日ワールドカップ開催をひかえ、一見華やかに見えるサッカーではあるが、その底辺では必ずしもいいことばかりではないようだ。ある日のこと、その監督に部員の父親から電話がかかってきた。かなり怒った口調で、息子は部を退くとだけ伝えたらしい。訳も分からず監督は本人の家を訪ね、その理由を父親に訊ねたところ、父親は次のように答えた。「先日、雨の中練習試合を見に行ったが、あれはなんだ！泥まみれになってあれがスポーツなのか。とても息子にはやらせられない。」芝のグランドであればよかったのかもしれない。またこれに限らず野外スポーツはユニフォームの洗濯が大変だからと敬遠する親が少なからずいるらしい。また昼食の話がとどめである。自分が小学生で部活動に励んでいたころ、休日練習の唯一の楽しみは母が作ってくれた弁当であった。この日ばかりは自分の好きなおかずがわんさと入っていたように記憶している。最近の小学生では、練習後の昼食はコンビニおにぎりがメインメニューらしい。またポットにお湯を入れてきて、カップラーメンという手もあるそうだ。ちなみに母親同伴の場合はさすがに母親がお湯を注ぐらしい。これらのエピソードを一般化するつもりはないし、親に全てを責任転嫁する気もない。ただ少なくともこのような現実があるのである。

ＯＬの普及対象の最優先は「こども」であることには間違いあるまい。そのこどもを支える最も身近な親の意志がこどもの選択に影響を与える。上述したような親がＯＬをしたいと思うであろうか。こどもにＯＬをやることを勧めるのだろうか。森の中でやはりカップラーメンをすするのだろうか。ごみは持ち帰ってくれるのだろうか。雨が降っても参加するのだろうか。自分には果てしなく疑問が湧いてくるのである。そして究極的な疑問、「ＯＬは、彼らをＯＬには向かないと片づけるのだろうか。」

ＯＬの可能性

ＯＬの普及に関し、否定的な面ばかりを述べてきたが、自分はＯＬファンの一人であり、競技としての可能性もそれなりに認識しているつもりである。ただ上記のような状況において、具体的な手段はと問われると頭を掻くしかなかった。だからこそ本誌２月号で、村越氏の「２２世紀に向けて」の「生きる力」と「ナヴィゲーションスキル」を絡めた一節を目にした時は目から鱗が落ちる想いであった。メディアに対してのアピールもさることながら、やはりOLの最大の魅力は実際に競技をすることにあると思う。競技の本質からはずれるといった議論はさておき、子どもが対象であれば、ゲーム的な要素を取り入れてこどもに「またやりたい」とおもってもらえるような工夫が必要であると思う。（無論このような試みは既に行われていることと察するが）また生涯学習の観点からしても OL には高齢者になっても楽しめる要素があると自分は確信している。実際トレイル―O はＯＬの持つ無限の可能性が具現化された好例だと思う。

英文和訳の翻訳ソフトの開発がすすみ、もう数年もすれば完全に実用化に耐えうるレベルにまで達するかもしれない。だからといって英語教育は廃れるであろうか。そうは思えない。同様にＧＰＳの改良が進み、ますます一般大衆に普及ししつある現在だからこそ、己の能力だけで正しい方向を見極める能力が再認識されていいはずである。そしてＯＬの「正しい方向」とは物理的なものだけでなく、内的に進むべき道であったり、ひいては社会の向かうべき方向にも導く誘因をも包括しているように思えてならない。競技団体の皆様にはＯＬ普及の更なる道を模索してもらい、具現化していただきたいと切に願う。

WGでお会いしましょう

いよいよWGまであと半年を切った。ＩＯＦをはじめとする OL 関係者がWGに寄せる熱い想いには心打たれるものがある。事務局の一員としてだけではなく、一個人として私はWGオリエンテーリング競技の成功のために全力を注ぐ所存である。また一ＯＬファンとして世界の一流選手が真夏の秋田の砂防林を駆け抜ける姿を目の当たりにするのを心待ちにもしている。ひとりでも多くの読者の皆様がこの夏、秋田に足を運んでいただければ幸いである。よろしくお願いいたします。

最後に繰り返しになりますが、素人故の浅はかな洞察および乱文をお許しください。